

■九州朝日放送番組審議会議事概要（11月分）

第598回	九州朝日放送番組審議会 議事概要
開催年月日	平成29年11月20日（月） 午後3時30分～4時55分
開催場所	九州朝日放送 本社役員会議室
出席者	<p>委員総数 8名 出席委員数 6名</p> <p>(出席委員) 古宮 洋二 委員長 池田 勝 委員 守田 有理子 委員 鶴 利絵 委員 安恒 万記 委員 戸田 康一郎 委員</p> <p>(放送事業者側出席者名) 代表取締役社長 和氣 靖 常務取締役 二木 清彦 取締役編成制作局長 清水 透 ラジオ局長 園田 哲也 報道局長 臼井 賢一郎 報道局報道部 ディレクター 北里 純一 報道局映像管理部 樋口 勝史</p> <p>視聴者・広報室長兼審議事務局 奥園 徹 視聴者・広報室兼審議事務局 松永 俊郎</p>
議 題	<p>議 題<テレビ番組> ダイワハウススペシャル「沖ノ島～藤原新也が見た祈りの原点～」 放送日：7月25日（火）午前9時～9時54分（BS朝日）</p> <p>報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 平成29年11・12月 ラジオ・テレビ番組編成状況 平成29年10月 視聴者・聴取者応答状況の報告 第86回テレビ朝日系列24社放送番組審議会代表者会議について 第23回PROGRESS賞について 次回平成30年1月度（第599回）審議会日程 1月16日（火）午後4時～開催 <課 題>テレビ番組 テレメンタリー2017「お弁当レター 娘へのエール」について 放送日：10月1日（日）午前5時50分～6時20分 その他
議事の概要	<p>◎委員の意見（概要）</p> <p>委員からは、</p> <ul style="list-style-type: none"> ○今年ユネスコの世界遺産に登録された沖ノ島を扱った、非常にタイムリーな番組だった。今まで断片的にしか知らなかった沖ノ島の全体像を知ることができ、大変になる内容だった。『「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群』として世界遺産の一括登録にこだわった理由も当番組を視聴して理解できた。 ○沖ノ島で頑なに受け継がれてきた風習や厳格なしきたり、海の正倉院との異名を持つ沖ノ島から出土された8万点にも及ぶ国宝の品々、今も島を守り続けている宗像大社の神官や宮司からの話など盛りだくさんの内容だった。沖ノ島は、普段は立ち入ることができない神聖な場所であり、資料映像としての価値も高いのではと思う。 ○写真家・作家の藤原新也氏は目で見るとはなく空気を感じるだとか、岩自体がご神体と表現するなど芸術家としての感性が素晴らしい。そんな藤原氏自身が撮影した写真と沖ノ島に対する考えや思いを話すとともに、ドローンやCGを駆使した映像がふだんに取り入れられ、多くの工夫が駆使されてあったと思う。 ○番組のカメラワークが非常に素晴らしかった。もやの中に現れる沖ノ島は荘厳な雰囲気、本当に神様が姿を現したかのように思った。島の自然を映し出した時に草木や鳥の鳴き声などの全てが映し出され、空気感を感じるような映像だった。番組のカメラマンの尽力がうかがえ、こうした動く映像があつてこそ、藤原氏という表現者を通じて島の存在感や神聖な空気感を伝えることができたのではないかと思った。 ○藤本隆宏さんのナレーションも大変よく、声のトーンやスピードが番組内で合っていて心地よく耳に響き、番組をいい具合に引き締めていたように思う。ずっと画面に惹きつけられた。 <p style="text-align: right;">などの評価を頂きました。</p> <p>また、気になる点や望むこととして、</p> <ul style="list-style-type: none"> ○写真家であり小説家でもある藤原新也氏が独自の視点で、かなり強めの表現をされるのがちょっと気になったが、その藤原氏が「第3の島居から沖ノ島が始まる」というくだりでは、とても周りの空気が凛と張りつめたような様子が画面を通じて感じることができた。 ○芸術家や研究家の視点で番組を作るというのは確かに面白く、興味が増すこともあろうかと思うが、まだ謎の多い文化遺産である沖ノ島について純粋に「知りたい」という思う者にとって、写真家がどう感じるかを伝えようとした番組の構成は疑問符が残った。 ○番組の冒頭と終わりに田心姫神を暗示するような女性の映像があったが、抽象的な存在の女神を具体的な人の姿で表現するプロローグとエピローグの演出は本当に必要だったのか。かえって番組の格調を下げてしまったのではないか。 ○藤原氏が沖ノ島の祭祀について、祝詞の解釈から「日々の食事ができること、安全に暮らせること」の祈りが目的で「航海の安全祈願は付け足し」と断言したことにはやや唐突さを感じた。もう少し説明がないと視聴者は戸惑うのではないか。 <p style="text-align: right;">などの批評や提言を頂きました。</p> <p>これらに対して、担当者から、</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ドキュメンタリーを構成するにあたり、なぜ藤原新也氏かと言うと、先発するいくつかの番組より更に踏み込んだ形のものにしたかったから。自由に島を想起するような方を探すうちに、以前に沖ノ島を訪れ写真を撮影し著書が出版されたことがある藤原氏の想いと合致した。 ○写真家・芸術家でもある藤原新也さんは「自分はこうしたい」という希望を持っていた。一方のKBCにもテレビとしてこういう風に構成したいというものがあり、互いの意見を戦わせて制作にあたった。 ○沖ノ島がどういう島なのか番組を見終わった後に十分に伝わる作品にするため、これまで様々な重厚な映像を撮影してきた樋口カメラマンに撮影をお願いし、いなければスチールの藤原氏とムービーの樋口カメラマンが対峙するような構図で作品を作っていくと話した。 ○何度か選好所から見える沖ノ島を撮影に行ったが、なかなか気象条件が整わずに撮影が難しかったが、2月に地元の方から「見える」と連絡が入り駆けつけて撮影した。超望遠レンズを利用して、こちらに迫ってくるような印象的な映像を撮影できたと思う。 <p style="text-align: right;">などの説明をしました。</p>